

2021.12.14 発行

冬休みの課題(ここには掲載されていないが、授業中に課題の指示がある科目もあります。)		
科目	内容	提出
現代文	①「錬成 現代文2」P62～P75(「要約トレーニング」も学習しておくこと。) ②『重要頻出漢字リアルマスター3300』P4～39(2学期小テストの復習・提出は無し)	『錬成 現代文』 課題考査当日
古典	①『古典アチーブ2』P34～P37、P60～P63、P64～P73(「本文精読ノート」も学習しておくこと。) ②「古文単語315」P74～P139(2学期小テストの復習・提出は無し) ③「確認問題100本ノック」を参考にして、用言・助動詞、漢文句法(再読文字・使役・受身・疑問・反語)をしっかりと覚えること。	『古典アチーブ2』 課題考査当日
COM 英	① WINSTEP vol.3の全てを解き、答え合わせをして提出する。 ② スランブル part 4 イディオム(878～1306番)を覚える。①と②両方の範囲で課題考査。	『WINSTEP』 課題考査当日
数学	① キートレーニング数学演習ⅠⅡAB P.60～92の Get Ready の問題をノートに解いて提出。(ただし、以下問題は除く) ※除外ページ【文系→p.74, 76, 78 理系→p.76, 78】 別紙のチェックシートをノートに貼り提出すること。 (新たにノートを購入する必要はない) ルーズリーフでも可。	課題を解いたノート 課題考査当日
地歴	日本史B、世界史B、地理B共に授業中の指示に従うこと。	
理科	化学基礎 リポートノート 全部	最初の授業
	理系物理 リードLight ノート物理 p20～42 直接書き込み提出	最初の授業
	理系生物 New Global 生物 基礎チェック p89～90、p112～113、p129～130、p153～154 課題ノートにそれぞれ3回解くこと	最初の授業

行事予定 1月11日(火)始業式・課題考査 12日(水)課題考査・授業

1月15日(土)16日(日)進研模試

「なぜ、勉強をしないとイケないのか？」源氏物語 光源氏の教育論とアメリカン・ドリーム

2年5組担任

光源氏の教育論

源氏物語の中に、光源氏の教育論が出ている。二十一帖「少女（おとめ）」に、12歳で元服を迎えた、亡き葵の上との子である夕霧に対して、源氏はあえて叙位を六位にとどめ、官人の養成機関である「大学寮」に入れて勉学に励ませた。光源氏は次のように述べている。

高き家の子として、官位爵位心にかなひ、世の中盛りにおごりならひぬれば、学問などに身を苦しめむことは、いと遠くなむおぼゆべかめる。戯れ遊びを好みて、心のままなる官爵に昇りぬれば、時に従ふ世人の、下には鼻まじろきをしつつ、追従し、けしきとりつつ従ふほどは、おのづから人とおぼえて、やむごとなきやうなれど、時移り、さるべき人に立ちおくれて、世衰ふる末には、人に軽めあなづらるるに、取るところなきことになむはべる。なほ才（ざえ）をもととしてこそ、大和魂の世に用いらるる方も強うはべらめ。

(現代語訳) 高貴な家の子弟として、官位爵位が思いどおりになり、世の中の栄華におごる癖がついてしまいますと、学問などで苦勞するようなことは、とても縁遠いことのように思われるようです。遊び事や音楽ばかりを好んで、思いのままの官爵に昇ってしまうと、時勢に従う世の人が、内心ではばかにしながら、追従し機嫌をとりながら従っているうちは、自然とひとかどの人物に感じられて立派に見えますが、時勢が移って、頼む人に先立たれて、権勢が衰えた末には、人に軽んじあなどられて、取り柄とするところがないものでございます。やはり、「才」(知識・学問)を基礎としてこそ、「大和魂」(素養・才能)の働きが世間に認められるところもしっかりしたものでございましょう。

親の庇護があるうちは大丈夫かもしれないが、親がいなくなった後に子が没落してしまうようではどうにもならない。「才(知識・学問)」がなければ、いくら「大和魂(素養・才能)」があっても役に立たないということだ。これは千年前の源氏物語の時代でも現代でも通じる真実であろう。そして、身分社会であった平安時代に「才」が大事であると気付いていることが、光源氏(作者である紫式部<970年頃~1019年頃>)の優れた点だ。また、「なぜ勉強をしないとイケないのか。」という問いに対する一つの答えになっている。

注「大和魂」という言葉が、今残っている文献で最初に出てくるのは、『源氏物語』とされている。ここでは「大和魂」を 素養・才能 という意味で用いている。

アメリカン・ドリーム (American Dream)

移民の国アメリカでは Rags to Riches(ラッグズ・トゥ・リッチズ: ぼろ着から金持ちへ)という言葉がある。摩天楼(高層ビル)のどん底で靴磨きをしながらニューヨークの巷(ちまた)を知りつくしたラギット・ディック(ぼろ着のディック)と呼ばれる移民の少年がいた。ディックは詐欺師をやり込め、若者ギャングをさらりとかわし、紳士のガイドを務めるうちに、教育の必要性を痛感して勉強を始める。勉強の成果と運の強さから一流の会社に勤め、ビジネス・スーツを

着て仕事ができるようになる。そして、身を粉にして働き住居をかまえ、家族を持った。リッチズと言っても中流の暮らしを獲得しただけだが、これもアメリカン・ドリームと喧伝されてきた。

「日本ではアメリカン・ドリームといえば巨万の富をつかむということが想像されるが、米国では『固い職業・郊外のマイホーム』という話もあり、日本の理想と変わらない面もある。」とニューヨーク在住の友人が教えてくれた。

ぼろ着ではないが彼は、スーツケース一つで渡米した。コミュニティ・カレッジで猛勉強をし、ニューヨーク大学に進学する。そこでも学友に負けないように勉強し、大学院で MBA (Master of Business Administration : 経営学修士) を取得した。今は銀行に勤務し、家族とニューヨーク市郊外の住宅で生活している。

千年前の平安時代の貴族でも現代人でも、自由で自立した生き方をするのには勉強しないとイケないということなのだろう。